

今日のみことば

□ 12月11日(日) ルカ 3章

ヨハネはイエスが来られるのに備えて、荒野で悔い改めの宣教とバプテスマを開始した。イエスをご自分の働きを始められる前に、バプテスマを受けるためにヨハネの所へ来られた。

□ 12月12日(月) ルカ 4章

荒野での悪魔の誘惑を退けられたイエスは、行きなれた会堂で聖書を読み教えられ、この預言の救い主は自分だと宣言された。ある者は神をたたえ、ある者は言葉をいぶかった。

□ 12月13日(火) ルカ 5章

教える働きを始められたイエスは、ご自分に従う人々を招き始められた。イエスは悪霊や病気をいやされ、ご自分の権威を示された。

□ 12月14日(水) ルカ 6章

イエスは人々が、幸福にならねばならないわけを教えられた。そのために私たちは、どのように歩まねばならないか、またどのように愛の生活をすべきかを教えられた。

□ 12月15日(木) ルカ 7章

イエスはたくさんの方を教えられ、大勢に人々の病をいやされた。イエスは悪いことをした人々に、ご自分の愛を示されました。

□ 12月16日(金) ルカ 8章

イエスは「聞く耳がある者は聞きなさい」と教えを、たとえ話でされました。しかしイエスはそれでも、ご自身のメシヤとしての業を通してその働きを進められた。

□ 12月17日(土) ルカ 9章

イエスははいよいよ使徒派遣によるガリラヤ伝道を始められるイエスのこの事業の結果は決して成功とは言えなかった。イエスの顔はエルサレムの受難死へと向けられてゆく。

ろ ぼ No. 1793
2016年 12月11日
日本バプテスト立川キリスト教会
牧師 大川 博之

ルカ 1:31

あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。

ヨセフのいいなずけであったマリヤのところに、天使ガブリエルが訪れ、「おめでとう。恵まれた方。主があなたと共におられる」と告げ、さらに「あなたは身ごもって男の子を産む」といわれて、マリヤがどれほどの驚きと戸惑いを覚えたか察することが出来ます。これが救い主イエスの誕生の始まりです。まずこのことを頭にしっかり刻みつけておくべきです。

神はマリヤによって御子をこの世に送られたのです。マリヤがそれほどに神の目になかった人物であったという記録はありませんが信仰厚い人であったことは知ることが出来ます。マリヤは天使の告げる言葉をしっかりと受け止めて「わたしはは主のはしためです。

お言葉どおり、この身に成りますように」と答えました。私はこのマリヤの言葉のうちに、神に対する彼女の信仰を見させていただき、彼女の人柄を心に覚えさせていただくのでした。

マリヤについては、ヨセフのいいなずけであったと言うこととナザレの一乙女という以外に特筆すべきものはありません。マリヤがイエスの母とされたことは、実に神のみこころの中にあることで、私たちの思いを超えたもので、マリヤが受け止めたように、私たちもそれを受け止めるのです。

マリヤは、この畏るべき告知を、おののきながら聞いたことでしょう。今日の時代とは違う社会の中で、どのような出来事

が身に起こるかを想像することは出来ましたが、マリヤは天使の言葉を受け止めました。それが何であったか、私たちはしっかりと心にとどめなければなりません。

マリヤはみ告を受けた後、すぐに親戚のエリサベツを訪ねて身に起こったことの意味を知り、神の御名をほめたたえる「賛歌」を歌いました（ルカ1:46-55）。そこに歌われる神の慈しみにたいする感謝の言葉を聞かせていただくのです。このマリヤの賛歌は実に、神の約束のすべてに、確かな信頼をうたったものです。私はいかにマリヤが聖書に精通していたか不思議を覚えながら、ナザレの一乙女に注がれていた神の慈しみを心にとどめずにはおれません。どこで、どのように生きることも、神の御手は私たちの上から離れることはありません。私たちは聖書を通して確認させていただくのです。その中でマリヤの「わたしは、主のはしてめです」との言葉が出てくるのです。神の不思議をもマリヤは、ただ「これらすべてを心に納め」るのみでした。これがマリヤです。

聖母マリヤとして、主イエスと等しい扱いをされるがありますが、それは間違いです。マリヤがいかに聖書のみ言葉を信仰を持って生きてきたかを思い起こさせていただくのみです。神はそのご計画の中に私たちを置いておいでです。私たちはそのことを聖書に確認させていただくのです。マリヤのように。そこから、マリヤの賛歌が生まれました。身に起こるすべては神の御計らいの中にあります。すべてを主におゆだねするときは切れんばかりの祝福は私たちのものです。

————— 《 聖書の学び・祈祷会 》 —————
詩篇 127 神に依るのみ

この詩篇の表題をルター訳には「神の祝福に万事が依存している」と記されている。神への依存と神からの祝福が全生活の基盤であると教えられている。捕囚から帰還した人々によるエルサレムの復興がその背景になっていると考えられる。

荒廃したエルサレムの町を見て帰国した民が感じたことは、主が家を建ててくださらなければ勤労は空しいと言うことでした。自分たちの家の再建はもちろん、神の宮の再建もまた然り主がおもんばかってくださらなければ、心安らかではない。

さらにはこの神の祝福の継承は子どもです。子どもがたくさん与えられるのも神の恵みです。私たちが生きるすべては神に依るのです。子どもたちは神からの賜物、けっして偶然の産物ではありません。神が新しいのちの主です。神のみこころをしっかりと受け止めるのです。何事も神なしには成しえないことを心に銘ずべきです。



Read God's Word.